

序 章

本書の構成，課題，方法

I 本書の構成

本書は、序章と3部9章からなる。

第1部は、1975年に公刊した前著『部族—その意味とコート・ジボワールの現実—』の第2章「部族の現実」を加筆，修正したものである。サハラ以南アフリカ⁽¹⁾で部族とよばれてきたものの実態はどのようなものであるのか。全体を俯瞰的に概観したのち，コートジボワールに焦点をしぼり，諸部族の態様を具体的に検討する。

第2部は，それらの部族という集団的枠組みが，独立後の各国のいわゆる国家建設の過程で，どのような役割を演じてきたのか，この問題について筆者がこれまで発表してきた2つの論文をもとに，現時点で再検討し加筆，修正した。

第3部は，第1部，第2部の分析をふまえて展開する部族の意味論である。前著の第1章「部族の意味」，結論の「族的存在としての人間」を基礎に，部族の意味についての筆者の考究の成果としての結論である。

II 課題と方法

本書の課題は，アフリカ研究の文献のなかに登場してくる部族とは何かと

いう問題に、以下に述べる2つの視角から接近することにある。

その第1は、ある特定の集団を部族と認識する側の概念装置の問題としてこれを検討することである。特定の間人集団を部族とよぶ場合、認識する側の認識枠組みのなかで部族という概念がどのような位置を与えられているのかという問題である。

その第2は、この部族ということばによって指し示され、概括されているアフリカの間人集団を、より具体的、個別的な水準に引き戻してその実態を検討することである。植民地化に至る過程のなかで、それらは歴史的にいつどのようにして形成されたのか、また脱植民地化の結果として成立した国家という政治的枠組みのなかで、それらはどのようなものとして存在しつづけているのか、現実に生起しつつある事象にからめてその実態を検討することである。その際、可能なかぎりアフリカ全体を視野に取り込みながら、より精確に事態に接近するために西アフリカのコートジボワールに焦点をしぼって分析を行っている。本書の副題「その意味とコートジボワールの現実」は、以上に述べた本書の基本的接近方法を示している。

さて、本書は部族ということばの意味と、そのことばによって捉えられている現実との両側面から部族の問題に接近しようとするわけであるが、本論に入る前にこの接近方法に関連して、あらかじめ説明を加えておかなければならない点が若干ある。

本書の第1部、第2部は、アフリカで部族とよばれているものの実態を、コートジボワール国の場合を中心的な事例として検討することを課題としているが、ひとつの事象を意味と実態、認識するものと認識されるものにあたかも截然と分けて取り扱うことができるようにいうことは、いうまでもなくひとつの方法的作為にすぎない。ことばの意味に対して実態といっても、それはやはり人の目によって捉えられ、一連のことばによって表現されたかぎりでのそれであって、事実そのものではない。ましてとくに第1部で利用する資料は、主にフランス人人類学者たちの行った調査の報告書であり、筆者自身が実態調査を行ったわけではない。筆者自身としては、3回の現地滞在

経験⁽²⁾にもとづいてそれらの資料から得られる実態に関するイメージを補完しえた程度である。したがってコートジボワールの諸部族の実態といっても、それらはフランス人人類学者の目によってフィルターにかけられ整理され、一定の意味づけをされた情報である。しかし、たとえばコートジボワールのグロ族についての調査報告書の内容は、アフリカの部族についてのより概括的な論議よりもその実態に、より即物的に忠実であり、接近しているといえるであろう。その意味で、本書で部族の実態を事例的に検討するということは、ひとつの総体＝部族を、それを構成する要素（たとえばグロ族）に分解して検討することであるといってもよいであろう。

第1部でとりあげた資料の検討に際しては、各部族が部族として自らを確立するのは、いつごろ、どのような過程を経て、どのような性格のものとしてであったのか、19世紀末以降のフランスの植民地支配は、それらにどのような影響を及ぼしてきたのか、という点に力点をおいた。第2部では、すでに述べたように、独立以降のいわゆる国家建設の過程で、それらの部族という集团的枠組みがどのような役割を演じることになったのかという問題を解明することを課題とした。

第1部、第2部の分析をふまえて、第3部では部族ということばの意味を検討するが、そもそもこの部族ということばは、アフリカ研究の文献に頻繁に登場してくるにもかかわらず——あるいは一部にはそのためあって——、本論で述べるような人類学においてさえ必ずしもひとつの方法上の概念として純化、定着したものになっていない。部族という言葉の意味を問えば、論者の数だけその定義は存在しうるといっても過言ではない。本書で部族ということばの意味を検討するといっても、それらの千差万別の定義をひとつひとつ詳細に検討し、その検討を通じてさらにより適切であるとおもわれる独自の定義を提示するといった類の作業を意図してはいない。本書では、その意味内容が曖昧模糊として確定していない部族ということばの内容的な定義にはあまりこだわらず、この部族ということばが、他の類似のことば、民族、種族、氏族、親族、姻族、系族、血族、家族などとの関連で、どのように位

置づけられるのか、つまり他の同種のことばとの境界に注目する。

このような視角から光をあててみると、部族ということばのいわば輪郭が浮かび上がってくる。そして部族ということばに込められている千差万別の定義も一様にこの輪郭の内側におさまってしまうようにおもわれる。部族ということばの輪郭を明らかにし、今日、部族ということばが他のことば——とくに民族——との関連でどのように使い分けられているのかという点を検討したのち、このことばの使われ方について、ひとつの解釈を提示することが、第3部の最終的目的である。

次に、ひとつのことばの意味を検討するといった場合、考慮しなければならないのは外国語との関係である。英語をはじめとする欧米言語の影響を強く受けている現代日本語、とくに社会科学関係の諸概念を検討する場合、この点はとくに重要である。本書で検討しようとする部族ということばは、もちろん日本語に属するが、このことばの背後には英語のtribeが控えている。日本語の部族は、英語のtribeの訳語にすぎないといってもよいほどである。面と向かって部族とは何かと問われれば、日本語の部族は和服をぬぎすてて、英語の原典に引き返し、裸のtribeの姿をあらわにする。したがって本書でも「部族」の意味を検討するとしながら、実際には英語文献を通じて英語のtribeを検討している場合も多い。またスワヒリ語の「カピラ」(kabila)の訳語として部族をあてることも可能であろうが、スワヒリ語体系におけるkabilaの意味を託された訳語としての部族は、ここではさしあたり検討の対象外とする。スワヒリ語体系におけるkabilaと英語体系におけるtribeとでは、それぞれの言語体系のなかの位置づけにかなりのズレがあるものと推測されるからである。英語のtribeと語源的には同一であるフランス語のtribuも、第3部で指摘するように英語のtribeとはその用語法に若干のズレが生じている。したがって本書で検討しようとする部族は、英語におけるtribeにほぼ対応している、あるいはそのかぎりでの部族である。

しかし、それにもかかわらず本書で検討しようとするのは、実質的には英語体系におけるtribeであるとするのはさしひかえる。その第1の理由は、

本書で論じていることは筆者が日本語で行った論考の結果であり、それが英語世界におけるtribeの問題としても妥当しうるかどうかについては、確信がもてないということである。第2には、それは第1の理由とうらはらの関係にたつことであるが、本書で検討する部族は系譜的にはtribeの訳語ではあるが、一度、部族という日本語の衣をまとった以上、それはそれとして日本語世界のなかで独自の意味をもち、機能すると考えられるからである。たとえば、さきに部族に類することばとして、民族、種族、氏族などをあげたが、これらのことばのうち種族は、これに対応することばを英語に求めれば、部族と同じtribeであろうし、民族、氏族の場合には、一般的にはそれぞれnation, clanであろう。しかしそれらはいずれも部族=tribeほどの一義的対応関係はないようにおもわれる。そして日本語世界では、民族、部族、種族、氏族と列記されれば、これらのことばはいずれも族という共通の語幹を有し、まず語感的にこれらのことばが同類のことばと捉えられる。英語のclan, tribe, nationの場合にはそういうことはありえないではなかろうか。結論的には民族、部族、種族、氏族などの族という語幹に着目した論議を展開しようとする本書では、この意味からも、日本語世界の問題であると限定して論議を展開したほうが無難であるようにおもえるのである。

最後に、現代における部族ということばの使われ方について「ひとつの解釈を提示する」ということの意味について若干、敷衍して、序章のしめくくりとしたい。

第1部、第2部で検討する、今日アフリカで部族とよばれている集団の実態は、部族ということばが喚起する古典的なイメージからは、かなりかけ離れたものである。あることばが喚起するイメージとそのことばで指示される実態との乖離ということは、これは何も部族ということばに限ったことではなく、あらゆることばについて多少なりともいえることである。したがって両者の間にズレを発見したからといって、しかも検討する実態はあくまで個別の事情にすぎないのであるから、即座にそのズレを解消するために、それらの事例は定義上、部族とはいえないと排除したり、逆にそれらの事例も包

摂できるように定義の修正を試みることは無意味な作業であると筆者は考える。たとえば、コートジボワールのグロという集団は部族ではないと主張することは、一方では部族ということばを特定の意味づけをもって承認していることになる。他方では、グロ族が部族ではないとすれば、それでは一体、この集団は何なのかという問いに答えなければならない。またそれらの事例に見合った新たな定義を部族に与えるといっても、千差万別の事例に等しく忠実な定義を抽出することは不可能であろう。

本書で問題にしたいのは、ことばが喚起するイメージと実態の間に生じているズレの意味である。筆者は、ここにわれわれ現代人が考えてみるべき問題、われわれの世界認識の方法にかかわる問題が含まれていると考える。それを明らかにし、部族ということばそのものについての問題としては、世界の現状に照らしてこのことばの使われ方についてひとつの解釈を試み、提示することが、本書の最終的目的である。

〔注〕—————

- (1) 以下単にアフリカと記す。それはとくに断らないかぎり、サハラ以南のアフリカを意味する。
- (2) 第1回, 1967年9月～68年3月。
第2回, 1982年4月～84年3月。
第3回, 1988年4月～90年3月。